

巻頭の言葉

京都文教大学人間学研究所所長 越智 浩二郎

人間学研究所は創立以来、初代所長別府春海先生、2代目所長日野舜也先生の豊かなリーダーシップのもとに多彩な学際的研究を積み重ねてきました。それは個人の専門分野においても優れた研究能力を有する本学の諸教員が自らの専門領域を越えて他領域の専門家と協力、切磋琢磨しつつの成果であります。

それらは主として共同研究プロジェクトの形で進められ現在までに実に17のテーマが取り上げられてきました。又、これらの研究テーマにかかわる公開シンポジウム、公開講演会などを通して学外研究者、地域との連携も深めようとしてきました。2004年度には現代社会学科が創設され新たな学際研究の地平が開かれつつあります。

私、越智は2004年より所長に就任しましたが、言うまでもなく先の御二人の所長先生に比べるとそのリーダーシップ能力の見劣りするものであることは衆目の一致するところであります。ただ救いは、古来からの言い伝えにあるように「バカな殿様の国では將軍たちが十二分に力を発揮する」ということで、そういうことは歴史の各所で見受けられることです。この人間学研究所でもこの二年間に既にそのことの確かさが見てとれるようになっていていると思います。研究所所員の教員のみならず、まさしく全学の教員が十二分以上にそれぞれの持ち味、力量を寄せ合っていると思っています。それは本誌、「人間学研究第5号」をご覧の上確かめて頂きたいと思います。

ここではやや個人的な所感に偏しますが私にとって「人間学」について想うところを述べさせて頂くことで巻頭の言葉とさせて頂くことにします。

「人間学」という言葉は私にとって何かなつかしい響きをもって聞こえます。といってもM. シェーラーやM. ハイデッガーの哲学的人間学を若い時にしっかり勉強した、といった立派な話では全然ありません。ただ大学院生の頃、統合失調症の方々と心理療法に取り組み始めてその難しさに途方にくれていた時、L. ビンスワナーやM. ボスの人間学的精神医学というものに初めて触れ、そこで示された病者像に鮮烈なショックを受け、わずかに光明を与えられるような感じが思い出されるだけのことです。しかしその病者像は私の学んでいたどうしようもなく乾いた固い心理学的パースナリティー論とは全く違ったもので、病者の根源的な希求、何を求め何をめざして病んでいるのかをみずみずしく描き出したものでした。

そこでこの一文を書くに当たって「人間学」についていろいろな辞典で調べて(?)みました。そこで次のような文が目に入ってきました。「一般に、人間においては外・対象・客観に向かう態度が先で、内・主体・主観を反省する態度は後になる。＜人間の学＞の成立が神学、自然学にはるかに遅れ、＜人間の学＞の中でも自然人類学、文化人類学のように人間を対象として考察する学が先行し、人間的主体の自然的、文化的特質を全体として根本的に理解しようとする人間学、哲学的人間学が遅れるのは、上述の理由による。」

そうなんです。心理学はあまりに「外・対象・客観」に向かいすぎたのでした。それである心理学者が述べているようなおかしいことになるのです。「たとえば『希望』ということばについて考えてみる。(中略)ところが、これを心理学辞典で引いてみると、まずこの語が

載っていることはない。それはまた『絶望』においても同じである。いや『後悔』も『未練』も、あるいは『嫉妬』も『羨望』も（中略）。思えばおかしいことである。希望も絶望もない心理学とは、いったいなにか。そんな思いにもとられる」。心理学のように遅れてきた学問が客観性、学問性に固執するのは心情的には理解できなくはありません。しかし結果は上記のようにおかしなことになります。人間研の構成学問である文化人類学、社会学も学問性の確立に苦心していると思いますが心理学の轍を踏まないよう願っています。

その点わが人間学研究所はこれまでの成果を見ても、文化の内なるもの、心の内なるものにこだわりつつ血の通った研究が行われて来たと言えるのではないのでしょうか。この伝統を大切にしながらさらなる発展を願っています。